

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02579

研究課題名(和文)現代アメリカ文学におけるポスト・ディザスターの修辞学

研究課題名(英文)The Rhetoric of Post-Disaster in Contemporary American Literature

研究代表者

渡邊 真理子(Watanabe, Mariko)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：70389394

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：現代アメリカ文学におけるポスト・ディザスターの修辞学を定位するために、主に(1)ジェイ・マクナニー『グッド・ライフ』と同時多発テロの問題(2)ボビー・アン・メイソン『アトミック・ロマンス』における冷戦ノスタルジアと南部原発表象(3)ティム・オブライエンのベトナム小説群(4)原子力をモチーフにした冷戦期モンスター映画『マタンゴ』を分析した。その研究成果として、(1)ツインタワーの「対」のモチーフから導かれた南北統一以降のアメリカに対する内省的眼差し(2)戦争文学と災害文学の共振(3)「戦後」という時代の持続性(4)日米文化に通底する核の想像力と冷戦サバイバル等を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦争・災害・テロリズムの余波とともに生きる人間の生を描いた現代アメリカ小説を「ポスト・ディザスター」という枠組みで論じる批評的作業は、それが内包する時間的持続性を問題とするとともに、三つのナラティブの共振性を浮かび上がらせる。本課題で考察した作品群では、少なくともこれらの二つ以上が複合的に絡み合っている。アメリカ文学史を見渡しても戦争文学のように任意の型をもって発展してきたとは言い難い災害とテロリズムの物語が、その余波を描く過程で「戦後」表象のフォーマットと重複している点は注目に値する。

研究成果の概要(英文)： This project focused on examining how contemporary American literature portrays disasters and their aftermath. The study analyzed the following works: Jay McInerney's novels, including *The Good Life*, which criticizes the 9/11 attacks and depicts life in New York before and after the tragedy; Bobbie Ann Mason's *An Atomic Romance*, which explores Cold War nostalgia and nuclear issues; Tim O'Brien's works, which feature Vietnam war and its effects; and the Japanese monster movie *Matango*.

The results of the research include the relationship between the collapse of the Twin Towers and the uniting of North and South in American history, the connection between war literature and disaster literature, the persistence of the "postwar" period, and the nuclear imagination and Cold War survival common in Japanese and American culture.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：現代アメリカ小説 冷戦期アメリカ 核文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 「ディザスター (disaster)」を人類のサバイバルに関わる「災害 (人災および天災)・戦争・テロリズム」と規定する本研究を開始する以前の 21 世紀ゼロ年代には、すでに政治経済分野では “Disaster Capitalism” を唱えた Naomi Klein, *The Shock Doctrine* (2008)、社会学ではジャン・ピエール・デュピュイ『ツナミの形而上学』(2005) が上梓されていた。アメリカ文学分野では 2010 年代より 9.11 関連の研究書 Richard Gray, *After the Fall* (2011) や K. Miller 著 *Transatlantic Literature and Culture After 9/11* (2014) の出版が相次いでいた。

(2) 国内では東日本大震災を受けて <災害と文学> を考えるアメリカ研究が活性化し、私が文学分野の発表者として登壇したアメリカ学会第 46 回年次大会 (2012) の部会「災害と表象」で得られた知見は災害表象と戦争表象の共振であった。グローバル化に伴い一国中心のアプローチが有効性を失った現代、スマトラと東北、スリーマイルとチェルノブイリとフクシマを連動させることは専門家の間で共通理解となっていたが、災害文学・テロ文学の分野に戦争文学研究を反映させた研究は多くはなかった。

(3) Gayatri Spivak が *Death of a Discipline* (2003) で提唱した「惑星思考」に呼応する形で Wai Chee Dimock が *Through Other Continents* で提出した “deep time” の概念を軸に環境文学批評が更新された 21 世紀ゼロ年代の動向が、すでにディザスター文学と時間的持続性を考察する視点の一端を提供してくれていた。しかしながら、「ポスト・ディザスター」の「ポスト」の時間的持続性 (duration) を論じる知の枠組みはアメリカ文学研究において未完成であった。

2. 研究の目的

(1) 現代アメリカ文学におけるポスト・ディザスター (戦後、災害後、テロ攻撃後) の修辞学を定位し、災厄とともに生きる人間の生の形を考察する。核の恐怖が兵器から原子力災害と移行し、世界大戦に代わって国境を越えたテロリズムが新たな脅威となったグローバル化時代の災厄を描く文学が、現代人の普遍的な存在状況を映し出す「生き延びるための文学」となることを明らかにする。

(2) 災害・戦争・テロリズムを地続きの「ポスト・ディザスター」として捉え、そこに流れるアメリカ中心ではない「深い時間」を見つめること。アメリカと他国、冷戦期とポスト冷戦期を二分化することなくループ状に眺めるような文学研究のあり方を探る。

(3) アメリカと密接に関わってきた「戦後」日本のサバイバルの形を検討する。アメリカ文学に取り組む日本の一研究者として、それをポスト・ディザスターの概念から考察し、トランス・パシフィックな研究成果を導き出す。

3. 研究の方法

(1) アメリカのポスト 9.11 小説のなかでも評価が高いとはいえないジェイ・マキナーの『グッド・ライフ』(*The Good Life*, 2006) の双子のイメージと南部表象に光を当てることで、同時多発テロというディザスターをニューヨーク作家がどのように受け止めたのかを検討する。

(2) 「戦後」および「災害後」が連動した形で描かれているボビー・アン・メイスンの『アトミック・ロマンス』(*Bobbie Ann Mason, An Atomic Romance*, 2005) をアメリカ的なニュークリア・ナラティブの例として検討する。また、そこに描かれる原子力表象を日本の視点から批評的に定位するために、日本の原発小説との共通点および相違点を導き出して整理する。

(3) ポストベトナム戦争を描くティム・オブライエン (Tim O'Brien) の小説を精読し、「戦後」の持続性について検討する。代表作とされる『彼らが運んだもの』(*The Things They Carried*, 1990) 他ベトナム小説群だけではなく、『ニュークリア・エイジ』(*The Nuclear Age*, 1985) や『恋するトムキャット』(*Tomcat in Love*, 1998) などの戦争が遠景として描かれるようなアメリカを舞台とした評価の高くない作品も含め、小説家としてのキャリア全体を「ポスト・ディザスター」の視点から捉える。具体的には本課題遂行のための「アメリカ文学サバイバル研究会」を定期開催して随時進捗状況を報告するとともに、日本英文学会や日本アメリカ文学会の大会等で研究報告を行う。

(4) 冷戦期の日米文化表象を比較するために、原子力をモチーフとした本田猪四郎監督作の映画『マタンゴ』(1963) を取り上げ、特にそのアメリカを中心とする英語圏での批評的受容に注目しながら、高度経済成長期の日本における欧米の影響を原子力の平和利用の角度から読み解く。

4. 研究成果

(1) ポスト 9.11 のニューヨークとジェイ・マキナー

批評文献の読解から得られた「アメリカ小説では同時多発テロの事件が物語の遠景に置かれる傾向にある」という知見を『アメリカ文学研究』第 54 号に掲載した書評 (上岡伸雄著『テロと文学 9.11 後のアメリカと世界』) の中に反映した。関西大学で 2019 年 12 月に開催された

研究会「世界的内戦時代の英文学研究」での招待発表「ツインタワーから南北戦争へ Jay McInerneyの『The Good Life』における分断のモチーフ」では、この小説で同時多発テロ直後のグラウンドゼロが南北戦争後の南部と重ねて描かれていることに注目した。アメリカ本土が攻撃されたという経験を受け入れるために、それ以前に国内が戦場化した歴史を呼び戻すとなると南北戦争になる。主人公である男女の人物造型にそれぞれ南部人と北部人という寓意を与えるマキナーの意図は、この時点でははっきりと読みとることができなかったが、巽孝之監修『脱領域・脱構築・脱半球 二一世紀人文学のために』（小島遊書房、2021年）に寄稿した「ツインタワーの幻影 ジェイ・マキナー『グッド・ライフ』における「対」のモチーフ」において、発表原稿に大幅な加筆修正を施すことで明確にすることができた。つまり、物語においていわゆる不倫の関係にある南部人男性と北部人男性 ツインタワーの双子のイメージに具現化される が最終的に別れを選択するプロセスに、北部中心に発展を遂げてきた現代アメリカの根底にあった“unite”する暴力に疑念を呈する作家の視線が認められる。この論文において、モダニズム期以降の小説におけるニューヨーク都市表象の系譜とポスト9.11表象を接続しつつ、マキナーの小説群にみられる南北表象とツインタワーの「双子」のイメージをナショナルな暴力という視点から再読することができた。

(2)「戦後」と「災害後」の共振

ポスト・ディザスター表象における災害ナラティブの領域では、『アメリカ文化事典』（丸善出版、2018年）に寄せた項目「ロードナラティブ」において、コーマック・マッカーシー作『ザ・ロード』を取り上げ、21世紀というグローバル化の時代における災害のアメリカ的文化表象について論じた。核戦争・気象変動・自然災害と複数の解釈を可能にするようなポスト・アポカリプス的世界を描いた『ザ・ロード』であるが、ここでは伝統的にアメリカ的な自我形成と深く関わってきたロードナラティブというフォーマットが、グローバルなポスト・アメリカを舞台としている点が重要である。

2018年に共著『揺れ動く 保守 現代アメリカ文学と社会』（春風社、2018年）に書いた論文「戯れるアトムとイヴ ポビー・アン・メイスンの南部原発小説『アトミック・ロマンス』」では、それまで戦争や自然環境破壊を原因とすることが多かったアメリカのポスト・アポカリプス的物語に「労働」の側面が加わっていることに注目した。ここから、原発労働者を主人公とするメイスンのテクストが東日本大震災以後の日本が抱える問題と「原発と労働」という共通項をもつことが明らかになり、日米比較文化の視点からそれを岩井俊二や平石貴樹の小説と接続することができた。この論文で議論した主人公リードが家族史の継承として抱えている「冷戦ノスタルジア」は、冷戦期が歴史上の区分で定められた枠を離れ21世紀においても持続していることの証明であるが、そのような持続する冷戦期が核の問題と連動していることは、ティム・オブライエンの『ニュークリア・エイジ』の解釈に有益な視点をもたらす。オブライエンの物語に描かれるニュークリア・ディザスターの表象においても、「冷戦期」「ベトナム戦争」「家族」は切り離せない。

上記のようなベトナム戦争とその文化的影響および冷戦期アメリカ文化についての調査結果を『よくわかるアメリカ文化史』（ミネルヴァ書房、2020年）の第16章「冷戦と核とカウンターカルチャー」において発表することができた。

(3)ティム・オブライエン作品群にみる「戦後」とサバイバル

オブライエンの作品群に関しては九州大学西新プラザで定期開催していたアメリカ文学サバイバル研究会で報告を行ってきたものの、新型コロナウイルスの拡大と研究代表者の所属先変更にとまらぬ、2020年から3年間は休会となった。休会前の成果としては、まず、2017年10月の日本英文学会第70回九州支部大会における招待発表「ホームへの帰還 Tim O'Brienの『ヴェトナム』」が挙げられる。ここで、この作家のすべての小説に共通して認められる「ホーム」という概念の諸層についてまとめることができた。この発表原稿は今後著書として発表予定であるオブライエン論における「戦後」表象の一部となる見込みである。この準備段階として、朝鮮戦争を主題とする小説における「戦後」の描かれ方を理解するために、2017年6月に筑波大学東京キャンパスで開催された第66回冷戦読書会でトニ・モリスン作『ホーム』について口頭発表を行った。その結果、朝鮮戦争という「忘れられた戦争」の帰還兵表象とオブライエンが描く「負けた戦争」としてのベトナム戦争におけるそれが重なることを明らかにした。また、日本英文学会第91回全国大会特別シンポジウム「核の時代と文学研究」（於：安田女子大学）において研究発表「『The Nuclear Age』における冷戦サバイバル」を行うことができたのは大きな進歩であった。これが、ベトナム戦争作家として評されるオブライエンを、核戦争への恐怖、民間防衛、核家族という冷戦期の核文化の文脈に位置づける作業となった。このシンポジウムにお招きした写真家の石内都氏との意見交換によって、核とポスト・ディザスターという本研究課題における主要なテーマを学際的な視点から多角的に捉える重要性に気づいた次第である。

新型コロナウイルス拡大以降の成果としては、エッセイ「ソーシャルディスタンスと繭糸の物語」（松柏社 Web マガジン、2020年10月18日号）において、オブライエンの『ニュークリア・エイジ』における冷戦期の封じ込め政策と民間防衛の問題を、2020年以後のパンデミックにおける「隔離」へと接続した。奇しくもこれが冷戦期再考の意義を改めて考えるための契機となった。持続する「戦後」の問題については、依頼を受けて『アメリカ文学研究』第57号に寄稿した書評「諏訪部浩一著『カート・ヴォネガット』」において、「トラウマ」という問題設定が戦争小説においては冷戦期とポスト冷戦期を地続きのものとして捉えるにあたって極めて有効であ

ることを確認することができた。

2023年にアメリカ文学サバイバル研究会を専修大学生田キャンパスで再開し、同分野の専門家と意見を交換しながら、この作家のキャリア全体と研究史について検討を行ってきた。第37回例会における口頭発表「Tomcat in Loveにおける冷戦期とポスト冷戦期」では、オブライエンのキャリアにおいて異色であるコメディ小説を取り上げ、その研究史における位置づけを整理した。具体的には、これまで主流であった作品の定義 *In the Lake of the Woods* 出版後に精神の不調から断筆を宣言した作家が Tomcat in Love のトラウマを抱える主人公に自身を仮託し、その回復を描くことで作家に復帰したとする解釈 を覆した。この作品の重要性は先行研究が指摘するような重厚な「戦場」から喜劇的な「ホーム」への主題の移行ではない。むしろそれは、作家のキャリア全体に通底する、自身を戦場へ向かわせた「故郷」とその「盲目的な愛」をデフォルメして描いた点にある。

これと関連するもう一つの成果が専修大学人文科学研究所2023年3月定例研究会で行った口頭発表「小説家ティム・オブライエンのヴェトナム戦争」である。ここでは作家のキャリア全体を見渡した場合のベトナム戦争テーマを再検討し、伝統的な戦争小説において分割された領域として論じられてきた「戦場」と「ホーム」が地続きであることを明らかにした。

(4)冷戦サバイバルと比較文化表象

2020年8月にエコクリティシズム研究会ワークショップ“*Weirding Ecology*”で行った口頭発表“*Where Seductive Fungi Spread: Contextualizing Cold War Japan in Ishiro Honda's Matango*”では、日本・イギリス・アメリカの文化を比較しながら核戦争の余波と原子力エネルギーの推進という冷戦文化の文脈に映画『マタンゴ』を位置づけることができた。これは、ポスト・ディザスター表象のグローバル化を検討するという本研究課題の遂行において大きな進歩となった。東宝映画『マタンゴ』のマッシュルーム・モンスターに認められる原子力表象を検討するにあたって、その原作である英国作家ウィリアム・ホジソンの「夜の声」および同時代のアメリカの核実験とカウンターカルチャーの高まりを踏まえ、比較文化的視点から相対化しながら考察した。その結果、日米における戦後の核表象が誘惑的な性質を帯びたグローバルな感染ナラティブを形成していることが分かった。

2020年に *Ecocriticism Review* 誌に掲載した“*Where Seductive Fungi Spread: Contextualizing Cold War Japan in Ishiro Honda's Matango and William Hope Hodgson's "The Voice in the Night"*”は、上記の発表原稿に大幅に加筆修正を施したものである。核戦争・原子力エネルギー・汚染と感染という視点から日本とイギリスとアメリカの三つの文化を比較することで、戦後の高度経済成長期の日本で誕生した映画『マタンゴ』のキノコ表象に、(1)アメリカにおけるスペクタクルとしての核実験(2)60年代日本における消費と欲望(3)グローバルで文化的な感染ナラティブの諸相を定位した。

研究期間全体を通じて考察したポスト・ディザスターの修辞学によって、ベトナム戦争や9.11同時多発テロなどのアメリカ史における影の部分を描く作品には、戦争とホームとの分がちがたい関係を浮き彫りにしながらアメリカン・ホームという神話を問いただす視点が含まれていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Watanabe Mariko	4. 巻 14
2. 論文標題 "Where Seductive Fungi Spread: Contextualizing Cold War Japan in Ishiro Honda's Matango and William Hope Hodgson's "The Voice in the Night" "	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ecocriticism Review	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊真理子	4. 巻 57
2. 論文標題 「書評 諏訪部浩一著『カート・ヴォネガット トraumの詩学』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アメリカ文学研究』	6. 最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊真理子	4. 巻 -
2. 論文標題 「ソーシャルディスタンスと繭糸の物語」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 松柏社Webマガジン	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊真理子	4. 巻 95
2. 論文標題 書評:「渡邊克昭著『楽園に死す アメリカ的想像力と<死>のアポリア』(大阪大学出版会、2016年)」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『英文学研究』	6. 最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊真理子	4. 巻 90
2. 論文標題 「ホームへの帰還 Tim O'Brienのヴェトナム」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本英文学会第90回大会Proceedings』	6. 最初と最後の頁 311-312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊真理子	4. 巻 54
2. 論文標題 書評 上岡伸雄著『テロと文学 9.11後のアメリカと世界』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アメリカ文学研究』	6. 最初と最後の頁 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 "Where Seductive Fungi Spread: Contextualizing Cold War Japan in Ishiro Honda's Matango"
3. 学会等名 エコクリティシズム研究学会ワークショップ"Weirding Ecology" (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 _The Nuclear Age_における冷戦サバイバル
3. 学会等名 日本英文学会第91回全国大会特別シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 アイン・ランド『水源』第一部について
3. 学会等名 第78回冷戦読書会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 ティム・オブライエン『ニュークリア・エイジ』におけるポスト・ヴェトナムの修辞学
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第35回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 ジェイ・マキナニー『グッド・ライフ』にみる南北戦争と持続する戦後パラダイム
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第36回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 ツインタワーから南北戦争へ Jay McInerneyの_The Good Life_における分断のモチーフ
3. 学会等名 研究会「世界的内戦時代の英文学研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 Nuclear war とNuclear family オブライエン作品にみる戦争とドメスティシティについて
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第33回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 『ニュークリア・エイジ』と冷戦期再考
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第34回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「ホームへの帰還 Tim O'Brienのヴェトナム」
3. 学会等名 日本英文学会第70回九州支部大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「ティム・オブランエンのヴェトナム小説群におけるホームの位置」
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第32回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「ホームから読み解くティム・オブライエン」
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第31回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「_If I Die in a Combat Zone_におけるミネソタ表象」
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第30回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「ヴェトナム戦争小説におけるトラウマ」
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第29回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「戦場とホーム Toni Morrison作_Home_(2012)第7章から第12章を中心に」
3. 学会等名 第66回冷戦読書会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊真理子
2. 発表標題 「Mark A. Heberle著_A Trauma Artist: Tim O'Brien and the Fiction of Vietnam (2001)_を読む」
3. 学会等名 アメリカ文学サバイバル研究会第28回例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 巽 孝之、下河辺 美知子、越智 博美、後藤 和彦、原田 範行、渡邊真理子（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 554
3. 書名 『脱領域・脱構築・脱半球 二一世紀人文学のために』（論文「ツインタワーの幻影 ジェイ・マキナ ニー『グッド・ライフ』における「対」のモチーフ」	

1. 著者名 巽孝之・宇沢美子・渡邊真理子（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 『よくわかるアメリカ文化史』（「第16章 冷戦と核とカウンターカルチャー」154-159）	

1. 著者名 山口和彦、中谷崇、渡邊真理子（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 330
3. 書名 『揺れ動く<保守> 現代アメリカ文学と社会』（論文「戯れるアトムとイヴ ポビー・アン・メイソ ンの南部原発小説『アトミック・ロマンス』 243-273）	

1. 著者名 アメリカ学会編、渡邊真理子（項目執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 960
3. 書名 『アメリカ文化事典』（担当項目「ロードナラティブ」）	

1. 著者名 山口和彦、中谷崇編、渡邊真理子（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 336
3. 書名 『現代アメリカ文学における「保守」の諸層』（論文「戯れるアトムとイヴ 南部原発小説としての『アトミック・ロマンス』」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	馬場 弘利 (Baba Hirotoshi)	福岡女子大学・国際文理学部・名誉教授 (27103)	
研究協力者	越智 博美 (Ochi Hiromi)	専修大学・国際コミュニケーション学部 (32634)	
研究協力者	下條 恵子 (Shimojo Keiko)	上智大学・文学部・准教授 (32621)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------